大村西崖著『密教発達志』訳注研究（七）

元 山 公 寿

はじめに

本研究は、大村西崖（1868~1927）によって著された『密教発達志』を書き下して、現代の研究成果を参考にしながら、詳細な脚注を加えることを目的としている。本論文は、昨年までに発表したものの[1]続編で、第一章の「教の興りより隋に至るまで」の第46節「北涼の法衆の訳経」（底本の100頁）より、第69節「元帝、及び何登の呪法」（底本の137頁）までである。

以下に、訳注に当たっての凡例を記す。

凡例

一、 大村西崖著『密教発達志』（国書刊行会、1972覆刻）を底本とした。

二、 旧漢字は、当用漢字に改めた。

三、 書き下すに当たって、可能な限り、大村の返り点にしたがい、適宜、段落分けをした。

四、 大村による割り注は〈 〉で示した。

五、 経典名や著作名には『 』を、引用文には「 」を附した。

六、 人名には、可能な限り［ ］によって生没年、国王の場合は在位を補い、インド名が附されていない場合には、そのインド名を補った。

七、 地名に関しても、可能な限り［ ］によってインド名、及び現在の地名を補った。

八、 年号に関しても、［ ］によって西暦年を補った。

密教発達志巻一

日本　大村西崖撰

一、教の興りより隋に至るまで

46、北涼の法衆の訳経

北涼［397~439］の沙門法衆［~401~］、高昌郡［新疆ウイグル自治区吐魯番県付近］の人なり。永安中［401~412］に張掖［甘粛省張掖県］に来りて、河西王沮渠蒙遜［401~433］の為に『大方等陀羅尼経』[2]を訳す〈四巻、『出三蔵記集』二[3]、『開元禄』四[4]、『貞元録』六[5]〉。一に『方等檀特陀羅尼経』と名く。釈尊〈袒特（伏波旬）[6]、救摂衆生[7]、滅罪[8]、陳過[9]、懺悔[10]、華供養[11]。巻一・四〉、及び華聚〈伏波旬[12]、巻一〉・上首〈受行実法[13]、巻一〉の二菩薩の説く所の陀羅尼八首あり。又、仏像の前の焼香供養[14]、七日長斎持誦の法[15]、及び諸陀羅尼名[16]等を説く。

47、曇無讖の呪術、及び訳経

曇無讖〈法豊〉［Dharmakṣema，385~433］、中印度の人にして、婆羅門の種なり。六歳にして父を喪い、沙門達摩耶舎［Dharmayaśas］の弟子と為る。十歳にして、同学数人と呪を誦し、聡敏、群を出づ。初め、小乗を学び、兼ねて五明の諸論を覧る。後に専ら大乗を学び、年二十に至り、誦する所の大小乗の経、二百余万言なり。明らかに呪術を解し、向う所、皆、験あり。西域に号して大神呪師とす。嘗て王に従い、山に入る。王、渇きて、水を求むるに、得ること能わず。讖、乃ち密かに、石を呪して、水を出す。王、其の道術を悦び、深く寵遇を加う。之を頃くして、王、之を待うこと、漸く薄んず。讖、乃ち将に龍を呪して甕に入れ、天下をして旱ならしめんとす。密かに之を告ぐるものあり。王、怒りて、将に讖を捕えんとす。讖、誅を懼れ、亀茲［庫車］に奔り、遂に姑臧［甘粛省武威県］に至る。蒙遜、其の名を聞きて、之を招き、請いて、経を出ださしむ。是に於て、語を学ぶこと三年、方に伝訳に従事し、玄始三年［414］より十五年［426］に至る。嘗て蒙遜に告げて曰く、「鬼ありて

聚落に入る。必ず災疫多し」と。蒙遜、信ぜずして、躬ら見るを験と為んと欲す。讖、即ち術を以て蒙遜に加うるに、蒙遜、駭き怖る。乃ち呪を読むこと三日、蒙遜に謂て曰く、「鬼、北に去る。既んじて北境の外なり。疫死、万数なり」と。蒙遜、益す敬憚し、礼遇すること、弥よ崇し。会ま拓跋魏［386~534］の太武帝［423~452］、其の道術を聞き、使を遣わして、迎請す。且つ蒙遜に告げて曰く、「若し讖を遣わさずんば、則ち兵を加う」と。蒙遜、自から揆る。国弱く、命を拒むこと難し。兼ねて讖の多くの術、或いは魏の為に謀らんと慮る。乃ち讖の重ねて経本を西域に尋ねんと欲するの意あるに因り、偽りに、厚資を給して、発遣す。行くこと四十里、密かに刺客を遣わせ、之を害せしむ。時に義和三年［433］三月、讖の年、四十九なり〈『出三蔵記集』十四[17]、『高僧伝』二[18]、『貞元録』六[19]〉。

或いは謂く、初め、讖、東して鄯善［楼蘭］に入り、自から言く、「能く鬼を使い、病を治す。婦人をして多子ならしむ」と。鄯善王の妹の曼頭陀林と私通し、発覚して、亡げて涼州［甘粛省武威県］に奔る。蒙遜、之を寵し、号して聖人と曰う。讖、男女交接の術を以て、婦人に教授す。蒙遜の諸の女子婦、皆、往きて、法を受く。太武帝、蒙遜の讖を魏に遣わすを忌みて、之を害するを知る。乃ち昭儀に沮渠氏の死を賜い、其の宗族を誅す〈『魏書』九十九[20]、『北史』九十三[21]〉。

①陀羅尼の瓔珞荘厳

讖の訳す所に呪経なしと雖も、『大集経』[22]〈六十巻、方等〉に、陀羅尼の功徳を説くこと、寧ろ『般若』『華厳』を過ぐ。乃ち是の経に至って、陀羅尼と戒・定・慧と、並びに愈よ大乗菩薩の必須の所学の一と為る。

経〈巻一〉に云く、「菩薩に四の瓔珞荘厳あり。戒・三昧・智慧・陀羅尼、是なり。陀羅尼の瓔珞荘厳に一種あり、謂う所の不失念心なり。二種あり、先受・畢竟能持なり。三種あり、知義・知字・知説なり。四種あり、正語・了語・無礙語・不謬語なり。五種あり、依義不依於字・依智不依於識・依了義経不依不了義経・依法不依於人・依出世不依於世なり。六種あり、如説而持・所言誠実・発言人所楽聞・憐愍語・生善芽語・時語なり。七種あり、利語・荘厳語・無礙語・無滞語・無二語・先知而語・了語なり。八種あり、知方俗語・知鬼神語・知諸

天語・知諸龍語・知乾闥婆語・知阿修羅語・知金翅鳥語・知畜生語なり。九種あり、無畏語・無縮語・無難語・知解脱語・知如法答語・知広説語・知次第語・説無常語・無尽語なり。復、十種あり、壊疑網語・開示界語・開法門語・開智慧語・破闇冥語・解一一字語・讃歎仏語・呵煩悩語・分別根利鈍語・開仏功徳妙語、是なり」[23] と。

諸を『大品般若』・『大論』等に説く所に比して、陀羅尼、復、三昧・等忍の如き唯心法門にあらずして、既に専ら言語・辯舌に関わるものと為るを見るべし。蓋し心地陀羅尼の興るより、幾くもなく、皆、口誦陀羅尼と為る。其れと、明呪との差別、遂に復、見るべからず。

又〈巻四〉、「師子幢菩薩、問て曰く、菩薩摩訶薩、何等の陀羅尼門を獲得せば、而も能く一切の仏語を受持し、凡そ演説する所の字句、及び義、窮尽あることなきや。陀羅尼自在王菩薩、乃ち八陀羅尼を以て之に答え、且つ其の無量の功徳を説く。八陀羅尼とは、即ち浄声光明・無尽器・無量際・大海・蓮華・入無礙門・四無礙智・仏荘厳瓔珞陀羅尼、是なり」[24] と。又、曰く、「阿一字に一切法を説く」[25] と。乃ち四十二字義門なり。『般若』に説く所に同じ。而も是の経の出す所の陀羅尼、甚だ多く、其の数、実に百余章あり。釈尊・諸仏・月光童子［Candraprabhā］・日行蔵・炎徳・光味・月蔵・須弥蔵・地蔵［Kṣitigarbha］・無尽意［Akṣayamati］・文殊［Mañjuśrī］・観音［Avalokiteśvara］の諸菩薩、梵［Brahmā］・釈［Śakra］・四天王・功徳天［Śrīmahādevī］・明星天子［Aruṇa］・太白魔・魔王波旬［Pāpīyas］・曠野鬼［Āṭavaka］・阿修羅王［Asura］・龍王［Nāgarāja］・乾闥婆［Gandharva］・仏弟子・浄徳優婆塞等、各の之を説く。其の目、大集金剛法心因縁自在[26]〈巻二十一〉・法目[27]・光目[28]・聖目[29]〈巻二十二〉・宝髻[30]・蓮華[31]・宝幢[32]・大行[33]〈巻三十一〉・断業[34]・浄業[35]・尽苦[36]〈巻三十二〉・日蔵法行壊龍境界焰品尽一切衆生悪業[37]・大力日眼蓮華[38]・随順空忍[39]・無尽根大授記[40]〈巻三十五〉・無願順[41]・智慧依止授記[42]・破一切悪業[43]・奢摩裴多悉致大授記[44]〈巻三十六・三十七〉・四諦順忍[45]・一切悪心衆生生歓喜心不信衆生悉皆惛睡[46]〈巻三十七〉・浄眼[47]〈巻四十四〉・賢面[48]〈巻四十五〉・住於閑林修第一義諦[49]〈巻四十九〉・第一義清浄平等[50]〈巻五十〉・大力勇猛不可害輪[51]・電光噤縮[52]・師子遊歩[53]・伏諸龍[54]・

休息衆病[55]〈巻五十三〉・息諸諍訟[56]〈巻五十五〉・令法久住・作世水宅心・水風摩尼宮・磨刀[57]・幢杖[58]・説一切如来語言音声幢蓋摩尼願眼[59]・説能懼尸利子利奴[60]・船花功徳[61]・豊饒[62]〈巻五十八〉等あり。

②守護経

其の功用、概して皆、得道・護法に在り。洵に大乗陀羅尼の大集蔵と為り、古来、守護経と称する所以も亦、誣言にあらず。斯の種の陀羅尼の隆興、蓋し東晋［317~420］の『大集経』述作の時を以て、其の極と為る。然り而して、其の持誦の事相、乃ち唯、洗浴・断食・像前香華供養・幢蓋荘厳・向東誦呪等[63]のみに過ぎず〈巻二十二〉。密法の発達、遂に是の門に於て顕著なるを見ざるのみ。

『作世水宅心陀羅尼』[64]一巻〈『大日本続蔵経』三套五[65]〉、僅かに本経中の数呪を抄記するのみ。恐らくは、当に別巻を以て行ずべきものにあらずや。

③功徳天法

『金光明経』〈四巻、方等〉も亦、曇無讖の訳す所にして、功徳天所説灌頂章句一首あり[66]。財宝の増長を得んと欲さば、須く香泥を地に塗り、掃灑し、洗浴し、鮮白衣を著け、妙香を身に塗り、宝華瑠璃世尊を礼拝し、焼香し、散華し、種種に供養して、之を誦すべし〈巻二〉[67]。是れ則ち、方等部の中に在りて、持誦作法の稍や備わるものと為る。

④四方四仏

此の経に、又、四方四仏あること〈巻一・二[68]〉、『観仏三昧経』[69]に同じ。辯才天［Sarasvatī］・堅牢地神［Dṛḍhāpṛthivī］・散脂大将［Saṃjñeya］等も亦、此の経の説会に列して、護法を誓う[70]。則ち『法華』『大集』の顰に仿うものにして、畢竟、経法の尊貴を示さんと欲するに過ぎざるのみ。

⑤辯才天

辯才天、原名は縛支〈vāc〉にして、言語の義なり。後に薩羅娑縛底［Sarasvatī］と称す。即ち吠陀［Veda］に謂う所の七河の一にして、信度［Sindhu,

Indus］に流入するものなり。辯才天、乃ち其の河神と為る。初め、祭祀の頌歌を掌り、又、豊饒の神と為る。是れ、其の頌歌の神意に愜わば、則ち所願成就するの義に本づく。又、河水灌漑の徳に取ることあり。補羅拏［Purāṇa］の所説に至って、其の神格、倍す高大し、終に辯舌・学問・音楽の神と為り、吠陀の母と呼び、梵語・梵字の作者と称し、立ちどころに梵天妃と為る。

其の像、白肉美貌にして、白衣を著け、白蓮に座し、或いは鵞に乗り、或いは孔雀に乗る。二臂なれば、琵琶を弾き、四臂なれば、未敷紅蓮華・金杯・琵琶、及び吠陀の経夾を以て持物とす。或いは蓮華・経夾・珠鬘・小鼓を執り、其の蓮華、則ち以て梵天に捧ぐ。

又、八臂像あり。縛羅訶補羅拏〈Varāhapurāṇa〉に之を説く。梵天、嘗て諸神の請に依って、阿修羅を退治せんが為に、其の観想の裡より之を化生す。八臂に螺［śaṅkha］・輪［cakra］・棓［gadā］・索［pāśa］・剣［khaḍga］・鈴［ghaṇṭā］・弓矢［dhanu］を執り、往きて忽ち阿修羅を伏すと云う[71]。

⑥地天、及び天父

堅牢地神、即ち地天［Pṛthivī］なり。太古の神に天父〈Dyaus〉あり[72]。希臘［Hellas］・羅甸［Latin］の神伝に称する所の天父〈Zeus，Jupiter〉、語原、既に同じ。蓋し亦、之を襲ぐ。地天、之と偶生して、其の妃と為る。夙に讃誦吠陀［Ṛgveda］に出づ。然れども帝釈の信仰、早く興りて、天父、多く崇拝せられず。故に補羅拏に至らば、則ち地天を以て、比里底王〈Pṛthu〉の妃と為り、慈悲忍辱して、能く果穀を長じ、以て蒼生を養うと云う[73]。亦、皆、外道の神に取る。

伝に謂く、迦葉摩騰［Kāśyapamātaṅga，1世紀］、嘗て『金光明経』を西印度に講ずと〈『開元録』一[74]〉。知らず、後漢の代［25~220］に、果たして此の経ありや不や。

『悲華経』[75]〈十巻、方等〉、即ち西晋［265~316］訳の『悲分陀利経』[76]の異訳なり。其の呪、前訳に同じ。

『大般涅槃経』〈四十巻、玄始十年［421］十月二十三日に出す〉の波旬［Pāpīyas］の説く所の一呪〈巻一〉[77]、法顕［ca. 360~430］訳の『泥洹経』に同じくして[78]、

更に釈尊、魔をして阿難［Ānanda］を放たしめんが為に説く所の陀羅尼一首を加う〈巻四十〉[79]。

⑦請雨呪

『大方等大雲経』[80]〈又、『無想経』と云う。六巻、涅槃部〉に、降雨、及び祈雨の呪、各一首を載す〈巻三、四〉[81]。請雨法の萌芽なり。

48、沮渠京声の訳経

安陽［河南省安陽県］侯、沮渠京声［~455~］、其の先、天水臨成県［甘粛省天水市］の胡人にして、蒙遜の従弟なり。曇無讖の河西に入り、仏法を弘むるに因りて、幼にして五戒を稟け、衆経を諷誦す。嘗て、于闐国［新疆ウイグル自治区和田］に到り、瞿摩帝大寺［Gomatī］に於て、天竺の法師仏陀斯那〈Buddhasena〉に遇い、禅法秘要術を受けて、涼に帰る。茂虔［沮渠牧犍，433~439］の承和年中［433~439］を以て、『治禅病秘要法経』[82]〈二巻、小乗〉を訳す。治風大・憶持一切音声の二呪あり[83]。既んじて涼、滅す。京声、遂に南して宋［420~479］に奔る。孝建二年［455］九月八日起首し、二十五日に訖り、『治禅病経』を建業［南京市］の竹園精舎に書す。同年、又、『観弥勒菩薩上生兜率天経』〈一巻〉[84]を訳す。此の経、密部に編すと雖も[85]、呪なく、事相なく、純然として顕経たり。京声、大明［457~464］の末、疾に遘いて卒す〈『治禅病経後序』[86]、『出三蔵記集』二・十四[87]、『高僧伝』二[88]、『開元録』四[89]〉。

49、北涼の失訳経

北涼の失訳経に、『大方広十輪経』[90]〈八巻、方等大集部〉あり。『大集』「第十三分」と同本なり[91]。地蔵菩薩、及び天蔵大梵の説く所の呪二首〈巻一、四〉[92]を出す。

50、元魏の慧覚等の訳経

元魏［386~534］の太平真君六年［445］、涼州の沙門慧覚・威徳等、于闐より還りて、高昌郡に到り、『賢愚経』[93]を訳す〈十三巻、小乗。『出三蔵記集』九[94]、『開元録』六[95]〉。金色の蹤迦羅毘〈堅誓〉獅子の死に臨みて説く所の一呪あり[96]。

51、曇曜の造像、及び訳経

曇曜［~460~］、何許の人か詳かにせず。少くして出家し、大安元年[97]、文成帝［452~465］の命を蒙り、北の代京［平城, 大同市］に至り、沙門統と為り、霊巌を武州山に造る〈『魏書』「釈老志」[98]、『開元録』六[99]、『続高僧伝』一[100]〉。龕窟の諸像、今、尚、儼に存す。其の中に、三面八臂にして、牛の背に乗るもの、五面六臂にして、金翅鳥［garuḍa］に乗るものあり。又、別に五面六臂等の像あり。皆、手に弓箭・矟・戟・鳥獣・蒲桃・日月等を把る。蓋し牛に乗るもの、即ち湿縛［Śiva］、鳥に乗るもの、即ち毘紐［Viṣṇu］、矟を執るもの、即ち毘沙門［Vaiśravaṇa］なるか。乃ち知んぬ、当時、已に是の如き諸神の像容を伝聞することありて、諸仏像の侍衛に用い、以て、荘厳に資す。且つ、以て之を崇敬す〈『支那美術史』「彫塑篇」に詳し[101]〉。和平三年［462］、曇曜、此の石窟の通楽寺に住し、天竺の沙門に対して、『大吉義神呪経』[102]〈四巻〉等を訳す〈『貞元録』九[103]〉。

①仏法中の結呪界法

『吉義経』、広く結呪界法、及び諸の成就法を説いて、曰く〈巻一〉、「我が仏法中に、結呪界法あり。能く人天をして大擁護を作さしむ」[104]と。是れ、蓋し此の法と外道の結界と、同じからざるを標牓するのみ。想うに、仏教の中の諸経の具に此の法を説くは、是の経を嚆矢とす。

②諸神の形像を図画す

呪界、又、呪場と云う。即ち壇場なり。仏像の前に於て、諸神の図像を列し、壇を其の前に築く。壇に重界あり。呪線を幢頭・樹上に繫げ、供養の資具を列す。又、火を焼きて、呪を誦し、以て成就法を行ず。『経』〈巻四〉に云く、「当に常に乳を食し、自らを浄め、洗浴し、鮮潔衣を著くべし。一切の人に於て、嫌心を生ぜず、諸の衆生に於て、当に慈心を生ずべし。仏像の前に於て、諸天・龍王の像、及び余の鬼神を作り、皆、形像を図け。

③七重界壇

牛糞を以て、地に塗り、七重の界を作れ。界場の中央に、諸の華鬘を著け、百一種の香を焼け。〈中略〉各各、彼の天像の前に於て焼け。此の呪を誦する者、右膝を地に著け、一百八徧して香を焼け。天像の前に於て、各の地を塗り、七処の呪場を作れ[105]」と。又〈巻四〉、云く、「七色の線を以て、結びて七結とし、七徧、呪を誦せ。当応に此の結を以て、幢頭に繫ぐべし。〈中略〉界内に樹あり。此の呪線を以て、樹上に繫げ[106]」と。乃ち、壇法の頗る備うるを見る。諸を前出の諸経に比すに、宛も天淵の如し。

④所願に依って、本尊、同じからず

成就法に種種あり。或いは雨を求め、或いは如意宝珠、或いは闘戦して敵に勝ち、或いは象馬駝に乗り、或いは夜叉・羅刹を使い、或いは形を隠し、或いは飛行し、或いは王臣歓喜し、或いは諸神を見、或いは諸天の所に往き、或いは火に入りて焼かず、或いは暴風雨を止む。其の法、其の求むる所に依って一ならず。

雨、若しは宝珠を求むれば、当に娑伽羅龍王［Sāgara］を供養すべし。象馬を求むれば、毘沙門天に於てせよ。諸鬼を使い、又、王臣等の歓喜を得んと欲さば、四天王に於てせよ。火に入らんと欲さば、魔王に於てせよ。風雨を止めんと欲さば、毘浮沙羅刹王に於てせよ。則ち、其の求むる所に従い、供養する所の神も亦、同じからず。

供養法も亦復、然り〈巻四〉。前来の諸経の説く所、願に依って、唯、呪を殊にするのみ。玆に至って、始めて諸尊法の将に其の形を成ぜんとするを見る。経の中に、明呪、甚だ多し。釈尊〈九首〉[107]・摩醯首羅［Maheśvara］〈二首〉[108]・梵[109]・釈[110]・四天王[111]・魔王[112]・化楽［Nirmāṇarati］[113]・他化自在［Paranirmitavaśavartin］[114]・他化[115]・焔摩［Yama］[116]の諸天〈各一〉・毘浮沙羅刹王〈二首〉[117]・毘摩質多羅［Vimalacitra］[118]・娑伽羅二龍王[119]・地神[120]〈各一、計二十七首〉、皆、各の之を説く。

⑤儀軌の濫觴

『経』の初めに、又、運心に焼香し、諸尊を供養する呪十六首[121]あり。其の説者を記さざるは、乃ち作経者の述ぶる所なり。蓋し是れ、後世に謂う所の儀軌の濫觴なり。訳者の曇曜の造る所の霊巌の諸像の中に、此の経に説く所の天神あるも亦、宜なるか。

52、勒那摩提の道術

勒那摩提［Ratnamati，~508~］〈宝意。摩、一に漫に作り、以て別人とす。恐らくは非なり〉、中印度の人なり。三蔵の教文を習い、凡そ一億偈を誦し、五明を善くし、道術に工なり。正始五年［508］、始めて洛陽に届り、永寧寺に住して、経を訳す〈『開元録』六[122]、『続高僧伝』一・二十五[123]〉。

53、菩提流支の呪術、及び訳経

菩提流支［Bodhiruci，~527］〈道希〉、北天竺の人なり。遍く三蔵に通じ、妙に総持に入り、志、宣法に在りて、遠く葱左に莅む。永平元年［508］、来りて東夏に遊ぶ。宣武帝［499~515］、勅を下して引労し、永寧寺に処して、四事供養し、以て訳経の元匠とす。孝静帝［534~550］の都を遷すに及び、流支も亦、移りて鄴［河北省臨漳］に居し、天平二年［535］に迄で、凡そ三十年、経を出すこと、頗る多し。兼ねて呪術に工なりて、能く抗衡するなし。嘗て井口に座し、澡缶の内、空なり。弟子、未だ来らずして、人の水を汲むなし。乃ち柳枝を操り、聊か井の中を搗し、密に誦呪を加う。泉水、上涌し、平らに井欄に及ぶ。即ち鉢を以て、酌みて、之を用う。人、其の神を測ることなく、咸、歎じて大聖人と称す。流支の曰く、「斯れ乃ち、術法なり。外国、共に行う。此の方に未だ伝えず。怪しみ、以て聖と為すのみ」と。世人を惑わすを懼れ、遂に秘して宜べず〈『続高僧伝』一[124]、『貞元録』九[125]〉。

①護童子法

訳す所に『護諸童子陀羅尼経』[126]〈一巻〉あり。梵天王、仏前に於て、十五鬼神の名相・所作、及び擁護童子の呪〈二首〉[127]を説く。其の持誦の法、五色の綖を結び、鬼神の名を書きて、飲食・香華・燈明を供養す[128]。『経』末に別

して乞夢呪一首を附す[129]。後世、此の経に依って法を行ず。名けて童子経法と云う。

流支、又、『深密解脱経』[130]〈五巻〉・『謗仏経』[131]〈一巻〉・『入楞伽経』[132]〈十巻、並びに皆、方等なり〉を訳す。

②法界殿所説の経

『深密経』、永熙二年［533］に出す所なり〈『経序』[133]〉。即ち唐［618~907］の玄奘［602~664］訳の『解深密経』[134]の同本の初出とす。此の経、釈尊、法界殿の如来境界処に在りて、之を説く[135]。亦、『華厳』『梵網』の天宮所説の類なり。

③八識・十地・十度等

『経』の中に明す所の八識・十地・十波羅蜜・諸法本不生の義等、皆、密教の教相の由来する所なり。

『謗仏経』と、法護［Dharmarakṣa, 239~316］訳の『決定総持経』[136]と同本異訳なり。其の陀羅尼句、不翻の例に依る。

『入楞伽経』の「陀羅尼品」の中に、持経者を擁護する為に説く所の呪に、二首あり[137]〈巻八〉。是に先んじて、宋の元嘉二十年［443］、求那跋陀羅［Guṇabhadra, 394~468］、『楞伽阿跋多羅宝経』[138]〈四巻、方等〉を出すと雖も、未だ呪あるを見ず。亦、以て出経の年代の降るに従い、明呪の漸く加うるを徴すに足る。

54、仏陀扇多の訳経

仏陀扇多［Buddhaśānta, ~539~］〈覚定〉、北印度の人なり。尤も芸術に工なり。正光六年［525］より東魏［534~550］の元象二年［539］に迄で、洛陽の白馬寺、及び鄴都の金華寺に於て経を訳す〈『開元録』六[139]、『続高僧伝』一[140]〉。『阿難陀目佉尼訶離陀鄰尼経』[141]〈一巻〉・『金剛上味陀羅尼経』[142]〈一巻、方等〉あり。

『陀鄰尼経』、即ち『無量門経』[143]の異訳なり。東晋訳に比して、新たに陀鄰尼四十八名等を出し[144]、所説、稍、広を加う。

『金剛上味経』に呪なしと雖も、陀羅尼の功用、及び其の変化自在の妙を説き、以て陀羅尼の自ら呪術に異なる所以を考うるに足る。

55、僧摩羅の呪術

僧摩羅、北印度の烏場国［Udyāna, Swāt］の人なり。来りて洛陽に住し、法雲寺を建つ。沙門の胡法を好む者、摩羅に就て、之を受持す。戒行の真苦なること、揄揚すべきこと難し。秘呪の神験、閻浮になき所なり。枯樹を呪して、枝葉を生ぜしめ、人を呪して、変じて驢とす。之を見る者、忻怖せざることなし〈『洛陽伽藍記』四[145)]〉。

56、西域諸国の外道の呪術の流行

正光元年［520］四月、魏の沙門恵生・宋雲、乾陀羅国［Gandhāra］に入る。国王、仏教を信じず、好みて鬼神を祀ると聞く。十二月、宋雲、烏場国に病み、婆羅門の呪を得て、差を得〈『洛陽伽藍記』五[146)]〉。

賒弥国［Chitral?］、仏法を信じず、専ら諸神に事う〈『魏書』百二[147)]、『北史』九十七[148)]〉。

高昌国、俗に天神に事え、兼ねて仏法を信ず〈『魏書』百一[149)]、『北史』九十七[150)]〉。

焉耆国［中国新疆ウイグル自治区焉耆県］も亦、同じ〈『魏書』百二[151)]、『周書』五十[152)]、『北史』九十七[153)]〉。

真君九年［448］、悦般国［Ili］、使を遣して朝献するに、一の幻人を送る。其の人、人を傷つけ、血を出し、骨を陥すとも、薬草を嚼ましめて、以て之を療するに、復た痕瘢なしと云う〈『魏書』百二[154)]、『北史』九十七[155)]〉。

惟うに元魏・斉［550~577］・周［557~581］の世、印度・西域の諸国、並びに外道の呪術の極めて盛んなるを見る。乃ち、其の仏教に影響して、呪法、愈よ其の隆興発達を逞せしむ所以、蓋し亦、自然の数なり。

57、劉宋の求那跋摩の呪術、及び訳経

劉宋［420~479］の求那跋摩［Guṇavarman］〈功徳鎧〉、元、刹帝利［kṣatriya］

の種なり。世、罽賓国［Kashmir］の王たり。祖父に至って、剛直を以て徙せらる。跋摩、年二十にして出家す。九部・四含に洞暁し、経を誦すること百余万言なり。深く律品に達し、妙に禅要に入る。時の人、号して三蔵法師と曰う。年三十に至って、罽賓王、殂して嗣なし。群臣、相議して、跋摩の王胤なるを以て、還俗して位を紹がしめんと欲す。懇請すること再三なるも、跋摩、納れず。遁れて師子国［SriLanka］に入り、進みて闍婆［Java］に至り、呪を以て国王の身傷を治すこと一再なり。元嘉元年［424］九月、文帝［424~453］、広州の刺史に勅して、舶を泛べ、之を迎う。乃至、路、始興［広東省韶関市］に由りて、虎市山寺に停まる。跋摩、其の宝月殿の北壁に於て、手自ら、羅云［Rāhula］像、及び定光［Dīpaṅkara］儒童［Māṇava］布髪の形を作る。毎月、光を放ち、之を久しくして、乃ち歇む。既んじて重ねて勅を蒙り、元嘉八年［431］正月、建業に達し、祇洹寺に住して経を訳す。其の年九月二十八日、化寂す。春秋六十有五なり〈『高僧伝』三[156]〉。

①辞陀羅尼

其の出す所の『菩薩善戒経』[157]〈九巻、大乗律〉、菩薩摩訶薩の陀羅尼に四種ありと説て、曰く、法・義・辞・忍、是なり。法陀羅尼は、諸の法界を知り、義陀羅尼は、随順して義を解し、辞陀羅尼は、神呪を受持して衆生を利益し、忍陀羅尼は、心に寂静を楽い、坐禅し、思惟す[158]。経の中に説く所に一呪あり[159]〈巻七〉。

②陀羅尼明呪の全然混同

見るべし、明呪、益す盛んに仏教の内に行われ、遂に復た排斥すべからず。乃ち之を摂して、其の一種とし、名けて辞陀羅尼と曰い、以て其の存在を許す。陀羅尼と明呪と、全然、混同すること、蓋し晋［265~420］・宋［420~479］以後に在り。

跋摩、又、『優波離問菩薩受戒法』[160]を出す〈又、『菩薩善戒経』と名く。一巻、大乗律〉。其の中に東を向き、仏を礼するを説く[161]。

58、曇摩蜜多の訳経と図像

曇摩蜜多［Dharmamitra，356~442］〈法秀〉、罽賓の人なり。七歳にして出家し、博く群経を貫き、特に禅法を深む。生ながらにして連眉する故に、世に連眉禅師と号す。少くして遊方を好み、誓いて宣化を志し、諸国を周歴し、進みて亀茲に至る。遂に流沙を度り、燉煌［甘粛省敦煌県］に入る。之を頃くして、復た涼州に適く。元嘉元年［424］、転じて蜀［四川省］に入る。又、峡［三峡］に出でて、荊州［湖北省］に次し、遂に京師［建康、南京］に至る。初め、中興寺に止まり、後に祇洹寺に住す。十八年［441］に迄で、『虚空蔵菩薩神呪経』[162]・『観虚空蔵菩薩経』[163]〈並びに方等〉・『観普賢菩薩行法経』[164]〈法華〉・『象腋経』[165]〈方等、各一巻〉等を訳す。十九年［442］七月六日、定林上寺に卒す。春秋八十有七なり。

①迦毘羅神王

嘗て迦毘羅［Kapila］神王像を上寺の壁に画く。後人、之に則る〈『高僧伝』三[166]、『開元録』五[167]〉。

『虚空蔵経』、仏陀耶舎［Buddhayaśas，~412~］訳[168]と同本なり。所説、較略なりと雖も、呪、則ち粗ぼ相同なり。

『観虚空蔵経』、虚空蔵菩薩の観法を説き、経の後に、更に三十五仏名〈『宝積経』九十に出づ[169]〉・虚空蔵陀羅尼・集法悦捨苦陀羅尼〈共に『大陀羅尼神呪経』に出づ[170]〉等ある[171]は、疑うらくは後人の加うる所なるか。

『観普賢経』、普賢の観法を説く。

『象腋経』、『無希望経』[172]と同本なり。但し其の陀羅尼を翻訳するを異とす。

59、畺良耶舎の訳経

畺良耶舎［Kālayaśas, ~442~］〈時称〉、西域の人なり。三蔵に兼明にして、禅門、特に深し。或いは一の禅観に、七日、起たず。諸国を伝化し、遠く沙河を冒す。元嘉元年［424］を以て建業に至る。文帝、勅して鍾山道林精舎に止めしむ。乃ち『観無量寿仏経』[173]〈一巻、方等宝積部〉、及び『観薬王薬上二菩薩経』[174]〈一巻〉を訳す。元嘉十九年［442］、西して岷蜀［四川省］に遊び、後に還りて江陵［湖

北省荊沙市］に卒す。春秋六十なり〈『高僧伝』三[175]、『開元録』五[176]〉。

①観仏菩薩法

『観無量寿経』、始めて十六の観想を説く。

『観二菩薩経』、薬王、除障の為に一呪を説き[177]、薬上、降煩悩海灌頂陀羅尼を説く[178]が故に密部に編ずと雖も、専ら二菩薩身の観想を説く。

顧みるに、京声の『観弥勒経』、蜜多の『観虚空蔵』『観普賢経』、耶舎の『観弥陀』『観二菩薩』等の経、当時、相い尋で出づ。蓋し『般舟三昧』『観仏三昧』等の経の出るより、観仏菩薩法、漸く行わる。晋・宋の交［420］に至って、斯の種の作経の盛んなることを致す。跋摩・蜜多・耶舎等、皆、実に禅観を善くす。乃ち密教観法の由来する所なり。

60、阿那摩低の呪術

阿那摩低［Ratnamati?, ~455~］〈宝意〉、本姓、康にして、康居［Samarkand］の人なり。世、天竺に居し、孝建［454~456］中に来りて京師の中興寺に止まる。善く経論に暁く、亦、三蔵と号す。常に数百の貝子を転側し、立ちどころに吉凶を知る。又、神呪を能くし、香を以て掌に塗りて、人の往事を見る。世祖［482~493］、嘗て一の銅の唾壺を施し、人ありて、之を竊む。摩低、呪を誦じ、唾壺、自ら還る。其の然るを測ることなし。斉［479~502］の文恵太子［蕭長懋, 458~493］・文宣王［蕭子良, 460~494］、及び梁［502~557］の太祖[179]、並びに敬うに師礼を以てす。永明［483~493］の末年、所住に終る〈『高僧伝』三[180]、『法苑珠林』六十一[181]〉。

61、求那跋陀羅の呪術、及び訳経

求那跋陀羅〈功徳賢〉、中天竺の人なり。大乗の学を以ての故に、世に摩訶衍と号す。本、婆羅門の種なり。幼くして五明の諸論を学び、天文・書算・医方・呪術、該博せざるなし。後に毘曇［abhidharma］を読み、乃ち仏法を崇む。是に於て出家し、遠く師友を求め、博く三蔵に通ず。既にして師子国に到り、海に汎び、東に向う。中途、風、止み、淡水、復た竭き、挙舶、憂懼す。跋陀

羅、乃ち密に呪経を誦じ、俄にして信風、至り、密雨、降る。元嘉十二年［435］、広州に達し、刺史、表聞す。太祖［424~453］、使を遣わして迎接し、乃ち京師に至る。大明六年［464］、天下、亢旱す。跋陀羅、世祖［453~464］の勅を奉じて雨を祈り、密に秘呪を加え、明日、乃ち大雨す。太始四年[182]正月、卒す。春秋七十有五なり〈『高僧伝』三[183]〉。

訳す所に『阿難陀目佉尼訶離陀経』[184]〈一巻〉・『抜一切業障根生得生浄土神呪』[185]〈一巻、方等宝積部、元嘉［424~453］の末年に出づ。「神力伝」[186]〉等あり。

『訶離陀経』は、『無量門経』[187]の異訳にして、扇多訳の『陀鄰尼経』[188]に先じて出づ。所説、粗ぼ相同す。

①弥陀呪法

『得生浄土神呪』、阿弥陀呪法の初出とす。又、『阿弥陀仏根本秘密神呪経』[189]〈一巻〉あり。曹魏［220~265］の菩提流支訳と称す[189]。曹魏、恐らくは元魏の誤りか。蓋し後人、跋陀羅訳の『浄土神呪』と羅什［Kumārajīva,[190] 344~413］訳の『小阿弥陀経』[191]とを取りて、之を偽作するものか。

62、慧簡の訳経

慧簡、何許の人か知らず。大明元年［457］、秣陵［南京］鹿野寺に於て、『薬師瑠璃光経』〈一巻〉を訳す。一に『抜除罪過生死得度経』と名く。收めて『灌頂経』[192]に在り〈巻十二。義浄［635~713］訳『薬師経』序[193]、『出三蔵記集』五[194]、『開元録』三[195]〉。

①薬師法

薬師如来の形像を造り、供養礼拝して、以て其の救護を得る法を説く。是れ、薬師法の初出とす。

63、功徳直と玄暢の訳経と図像

功徳直［~462~］、西域の人なり。大明六年［462］、荊州に遊至し、長沙寺に居すこと数年、沙門玄暢［416~484］と共に『無量門破魔陀羅尼経』[196]〈一巻〉

を訳す。後に終る所を知らず。玄暢、河西金城［甘粛省蘭州市］の人なり。胡虜の難を避けて、元嘉二十二年［445］八月一日、走りて揚州に達す。経律を洞暁し、深く禅要に入る。占記吉凶、誠験さぜるなし。文帝、歎重し、請うて太子の師とす。後に荊州の長沙寺に止まる。手を舒べて香を出し、掌中に水を流し、之を測ることなし。

①十六神像

宋の季年［479］、西して成都［四川省成都市］に適き、初め、大石寺に止まる。乃ち手づから金剛密迹等の十六神像を画作す。昇明三年［479］、岷山に遊観す。斉の建元元年［479］四月二十三日を以て斉興寺を広陽県［四川省茂県］に建つ。武帝［482~493］、位に昇るに至り、文恵太子の徴迎を受けて東下し、中途、疾を発し、幾くもなく京師の霊根寺に卒す。春秋六十有九なり〈『出三蔵記集』十四[197]、『高僧伝』八[198]、『法苑珠林』六十一[199]、『開元録』五[200]〉。

②八鬼神像

『破魔経』は『無量門経』[201]の異訳なり。前訳に比して、所説、較、広を加う。且つ始めて八鬼神像を帛素に画きて之を供養し、行者、円壇に座して呪を誦すことを説く[202]。亦、事相発達の漸なるを徴すに足る。先に曇摩蜜多の迦毘羅神王あり。今、復、玄暢の十六神あり。見る可し、鬼神の図像、漸く支那に伝わることを。然るに其の像法に至らば、則ち経中に未だ曾て説かず。

64、宋代の失訳呪経

宋代の失訳呪経に『十方仏』『四天王』『十二因縁結縷』『摩訶』『移山』『降魔』『威徳陀羅尼』『和魔結神呪』あり〈各一巻。『開元録』五[203]、『貞元録』八[204]〉。然るに佚して存せず。

①支那撰述の呪経集

『灌頂経』[205]〈十二巻〉、東晋の尸梨蜜多羅［Śrīmitra，?~342］訳と称す。然るに梁の僧祐［445~518］の『出三蔵記集』〈巻二〉に、初の九巻を以て失訳

とし、末の三巻を以て後人の集むる所として[206]、其の蜜多羅伝の中に之を録さず[207]〈巻十三〉。『梁高僧伝』[208]〈巻一〉も亦、然り。隋［581~619］の法経［~594~］の『衆経目録』[209]〈巻一〉も亦、九巻と録し、失訳とす。費長房［~597~］の『歴代三宝記』[210]〈巻七〉、始めて九巻を以て蜜多羅の訳とす。唐の道宣［596~667］の『大唐内典録』[211]〈巻六〉に至らば、則ち十二巻を以て、皆、蜜多羅の訳とす。『開元』[212]・『貞元』[213]の二録、乃ち共に之に依る。然るに尚、其の巻数を疑い、未だ詳かならずとす〈望月信亨［1869~1948］の説[214]〉。但し僧裕、既に之を録す。其の世に出るの古きこと、乃ち知る可し。因て今、姑く茲に編す。

是の経に集むる所に十二種の呪経あり[215]〈各一巻〉。皆、冠するに仏説灌頂の四字を以てし、呪を呼びて灌頂章句と曰う。皆、是れ神名を臚列するものなり。故に経中に出す所の神名、極めて多し。然も其の梵言の疑う可きもの、少なからず。且つ経中の天帝・天尊・五官・天神地祇・太山・縣官・仕官・祭壇・殯葬・蠱道・卜易・神策・仁義・竹帛・鳳凰・麒麟・六畜・百節五脈等、印度の事物にあらざるもの、甚だ多し。又、其の「塚墓因縁四方神呪経」〈巻六〉に云く、「閻浮界内に震旦国あり。我、三聖を遣わし、中に在りて化導せば、人民、慈哀し、礼義、具足せん」[216]と。並びに其の道儒思想に混ずるを見るべし。又、以て其の支那の偽撰たるを証するに足る。而も其の「護比丘呪経」〈巻二〉に云く、「末世の九百歳中に到り、魔道、興盛す」[217]と。「塚墓因縁経」に亦、云く、「九百歳の時、諸の比丘の輩、斎戒を修さず」[218]と。惟うに仏滅後九百歳、即ち劉宋の初［420］に当る。知るべし、是の経、蓋し宋代に成るか。其の「生死得度経」[219]、慧簡の訳す所とすること、先に既に之を述ぶ。亦、以て全経の撰述年代を推考するに足る。然り而して晋・宋の際、呪法の世に行わるの状を考えんと欲さば、乃ち且く是の経を待つことなきを得ず。

②擁護法

其の帯佩護身呪〈巻一〉・護諸比丘呪・護比丘尼〈巻三〉・神王護身呪〈巻四〉[220]の四経、擁護法を説く。

③灌頂儀式

「護諸比丘呪経」の中に、灌頂授法の儀式ありて云く、「仏の言く、若し此の護身神典を受くる者あらば、先づ当に十方の仏に敬礼し、次に経宝に礼し、次に聖僧に礼し、次に度経の師に礼すべし。皆、当に専心一意に偏に右肩を露して、長跪し、合掌すべし。師、当に右手に文を持すべし。弟子、右手を以て之を受けよ。師、左手を以て法水を持し、弟子の頂上に灌げ。阿難よ、是の因縁を以ての故に灌頂章句と名く。然る所以は、王太子の王位を紹ぐ時の法の如し。応に水を以て其の頂上に灌ぎ、然る後に治国の事を統領すべし。我が法も亦、爾り。仏、阿難に語らく、若し比丘ありて、是の典を受けんと楽わば、応に五色の旛蓋を懸くべし。長さ、四十九尺にして、五方の花を散ずるは、各の随方の色なり。旃檀香・安息・婆膠等を焼き、斎戒、一心にして、五辛を食さず、酒を飲み、及び臭肉を噉うことを得ず。醍醐・酪酥・雑膩の諸物、悉く食すことを得ず。先づ当に身体を洗浴して、鮮潔の衣を著るべし。高山の上に於て、香汁を以て地に塗り、縦広、七尺にせよ。之を名けて壇とす。当に此の上より経を度すべし」[221] と。

④誦経法

「護比丘尼経」の中に、讃経の法を説て曰く、「当に身体を洗浴し、鮮潔の衣を著るべし。当に専心一意に此の経を讃詠すべし。当に五色の綵を以て好しき幡蓋を作すべし。香汁を地に泥み、縦広、七尺にせよ。十方の灯を然し、雑色の華を散じ、衆の名香・膠香・婆香・安息香を焼け。十方に礼拝し、七日七夜、長斎し、菜食し、五辛を噉わず、審諦に、疑うことなかれ」[222] と。

⑤安宅法

「守鎮左右呪経」〈巻五〉に、安宅法を説く。其の礼仏法に云く、「当に身・口・意を浄め、雑食五辛の属を噉わず、斎戒、一心にして、十方三世の諸仏に礼敬すべし。十方の灯を然し、雑名香・膠香・安息香等を焼き、五方に逐魔神の幡を懸けよ。各の長さ、一丈四尺なり。上に鬼神の形を作し、諸の浮遊魔・鬼・精魅を怖れさせよ。当に人定の時に在りて、中庭に露出し、此の神呪を読み、青銅の鏡を以て、五方を照曜して、諸の魔魅をして、其の形を隠蔵することを

得ざらしむべし。香を焼き、諸の名華を散ぜよ。師、当に専心一意に是の五方守護神名を説くべし。一方、四十九徧に至るまで、是の章句を誦せ」[223] と。

⑥安墓法

「塚墓因縁経」に安墓法を説く。

⑦文頭婁法

「伏魔封印大神呪経」〈巻七〉に伏魔法を説く。乃ち円木の上に諸神の名字を書く。是れ、文頭婁〈Mudrā〉と謂う。

「摩尼羅亶大神呪経」〈巻八〉に呪を持す種種の功能を説く。

⑧除病法

「摂疫毒神呪経」〈巻九〉に除病法を説く。

⑨卜筮法

「梵天神策経」〈巻十〉に策を以て吉凶を卜す法を説く。

⑩往生法

「随願往生十方浄土経」〈巻十一〉に浄土に往生する法を説く。

見るべし、洗浴・浄衣・長斎・塗壇・画幡・懸蓋・焼香・散華・用鏡照魔・神名印法等、事相、頗る備われり。豈に支那撰述の故を以て、忽諸に付すべけんや。

65、蕭斉の達磨摩提の訳経

蕭斉［479~502］の達磨摩提［Dharmamati, ~490~］〈法意〉、西域の人なり。永明八年［490］十二月十五日、揚都［南京］の瓦官寺に於て、僧正法献［?~497?］の為に『観世音菩薩除罪呪経』〈一巻〉を訳出す。今、亦、伝えず。此の経、及び『法華経』「提婆達多品」の梵本は、宋の元徽三年［475］、法献、西域を遊歴し、諸を于闐に得と云う〈『開元録』六[224]〉。

66、求那毘地の道術

求那毘地［Guṇavṛddhi，?~502］〈徳進〉、中印度の人なり。弱年にして道に従い、大小乗を諳究すること、将に二十万言ならんとす。兼て外典を学び、明かに陰陽を解し、候を占い、事を言い、多く徴験ありて、道術の称、西域に聞こゆ。建元［479~482］の初に京師に至り、永明十年［492］、経を訳し、中興二年［502］の冬、化す〈『高僧伝』三[225]、『開元録』六[226]〉。

67、曇景の訳経

沙門曇景、何許の人か知らず。『摩訶摩耶経』[227]〈二巻、涅槃部。『開元禄』六[228]〉を訳す。

経の中に釈尊の説く所の除病呪一首あり[229]。又、香泥塗地・供養・持誦の法を説く[230]〈巻上〉。見るべし、『金光明経』『大吉義経』以来、造壇・誦呪、益す行わる。

68、蕭梁の僧伽婆羅、及び曼陀羅仙の訳経

蕭梁の僧伽婆羅［Saṃghapāla，[231] 460~524］〈僧養〉、扶南国［Bnam］の人なり。舶に附き、京師に至り、天竺の沙門求那跋陀羅の弟子となる。天鑑五年[232]、勅して揚都に召され、経を訳して、普通元年［520］に至る。五年［524］、正観寺に卒す。春秋六十有五なり。

其の訳する所に『孔雀王呪経』[233]〈二巻〉・『舎利弗陀羅尼経』[234]〈一巻〉・『八吉祥経』[235]〈一巻、方等〉・『文殊師利問経』[236]〈三巻、大乗律〉等あり。其の梵本は、並びに扶南国の沙門曼陀羅仙［Mandra，~503~］〈弱声、又、弘弱〉の献ずる所なり。仙、天鑑二年[237]を以て来りて、梁都に至り、遂に『宝雲経』[237]〈七巻、方等〉等を訳す〈『続高僧伝』一[238]、『開元録』六[239]〉。

『孔雀王呪経』、前出ありと雖も、此の経に至って、頗る呪の数を増す。且つ多く仙・龍・夜叉・羅刹・諸鬼の名を挙ぐ。然るに未だ事相の見るべきものあらず。此の種の呪経、但し、呪を誦して、以て神を招き、災を禳わんとして、呪を説く。而も其の呪、唯、神名を陳ぶるのみ。乃ち呪経原始の風なるのみ。

『舎利弗陀羅尼経』も亦、『無量門経』[240] の異出にして、粗ぼ功徳直の訳と相同す。但し、画像・供養の事を説かず。原の梵本の述作、蓋し此の経を以て先とす。

『八吉祥経』、支謙［195?~254?］訳の同名経[241]、及び法護訳の『八陽経』[242] と同本なり。

①礼する所の物の変遷

『文殊問経』〈巻下〉に、花を仏足・菩提樹・転法輪処・塔、及び仏像等に供ずる呪十首を載して、摩花の法を説く。其の呪を誦する数、除病・祈雨等の願に依って、一ならず。律部の経典、尚且つ呪を持すことを説く。之を先の仏戒に比して、誰か其の転変を驚かざらん。供花の順序、足跡・道樹・法輪・塔波より、而も仏像に及ぶ。是れ、蓋し暗に仏徒の礼拝する所のものを挙示して、以て古より新に至るまで、殆ど先に論ずる所の如し。

②密教の諸菩薩の名

『宝雲経』、呪なしと雖も、列会の衆の中に、宝光［Ratnakara］・宝掌［Ratnapāṇi］・宝印手［Ratnamudrāhasta］・宝天廚・宝髻［Ratnaśikhin］・宝幢［Ratnaketu］・金剛胎［Vajragarbha］・金剛意［Vajramati］等の諸菩薩、

③十六賢士

跋陀婆羅［Bhadrapāla］等の十六賢士、賢劫［bhadrakalpa］の千菩薩等あり。密教の両部の諸尊の名、之に類するもの、尠からず。其れも亦、此に由来するものか。

④二十八部夜叉

『二十八夜叉大軍王名号』[243]〈一巻〉、亦、僧伽婆羅の抄訳する所と称す[244]。蓋し信ずること難しとす。四方・四維・上・下に各の四夜叉の名を掲げて、以て護国神と為るのみ。

69、元帝、及び何登の呪法

元帝［552~554］の『金楼子』〈巻六〉の「自序篇」に云く、「吾、齔年の時、呪を誦すに、道を法朗道人［507~581］より受け、浄観世音呪・薬上王呪・孔雀王呪を誦得す。中尉何登、善く能く外典の癰疽・禹歩を呪するの法を作すを解す。余、就きて、之を受く」[245] と。蓋し梁の世の呪法の盛んなること、遂に元帝・何登等をして、亦、之を能くせしむ。其の発達、洵に偶爾ならず。

注

1）拙著「大村西崖著『密教発達志』訳注研究（一）」（『大正大学研究紀要』98，大正大学，2013）、「大村西崖著『密教発達志』訳注研究（二）」（『大正大学研究紀要』99，大正大学，2014）、「鉄塔相承説をめぐって―大村西崖著『密教発達志』訳注研究（三）―」（小澤憲珠名誉教授頌寿記念論集『大乗仏教と浄土教』ノンブル社，2015）、「大村西崖著『密教発達志』訳注研究（四）」（『大正大学研究紀要』100，大正大学，2015）、「密教の発生をめぐって―大村西崖著『密教発達志』訳注研究（五）―」（小峰彌彦先生・小山典勇先生古稀記念『転法輪の歩み』（『智山学報』65，智山勧学会，2016）、「大村西崖著『密教発達志』訳注研究（六）」（『智山学報』70，智山勧学会，2021）

2）『大方等陀羅尼経』（T. vol.21，No.1339）

3）僧祐『出三蔵記集』「方等檀特陀羅尼経四巻〈或云大方等陀羅尼〉右一部凡四巻晋安帝時高昌郡沙門釈法衆所訳出」（T. vol.55，No.2145，p.12a）

4）智昇『開元釈教録』（T. vol.55，No.2154，p.519b~c）

5）円照『貞元新定釈教目録』（T. vol.55，No.2157，p.816b）

6）『大方等陀羅尼経』「仏告華聚菩薩摩訶薩我当以摩訶袒持陀羅尼章句伏此波旬増彼比丘善根」（T. vol.21，No.1339，p.642a）、正蔵では「袒特」ではなく、「袒持」

7）『大方等陀羅尼経』「文殊師利此陀羅尼是過去七仏之所宣説如是七七亦不可数亦不可計説此陀羅尼救摂衆生」（T. vol.21，No.1339，p.656b）

8）『大方等陀羅尼経』「善男子此陀羅尼若有読誦受持如法修行九十七日日誦四十九遍乃一懺悔随師修行是諸悪業若不除滅終無是処」（T. vol.21，No.1339，p.656c）

9）『大方等陀羅尼経』「応自陳過向此比丘作如是言」（T. vol.21，No.1339，p.657a）

10）『大方等陀羅尼経』「亦応読誦修行此陀羅尼誦四百遍乃一懺悔」（T. vol.21，No.1339，p.657b）

11）『大方等陀羅尼経』「爾時世尊即従座起到於華所以華供養是諸仏等華供養已即説陀羅尼曰」（T. vol.21，No.1339，p.658b）
12）『大方等陀羅尼経』「爾時華聚菩薩語雷音言汝今善聴当為汝説伏諸悪趣我当伏此波旬」（T. vol.21，No.1339，p.642b~c）、華聚菩薩が二つの陀羅尼を説き、魔王も陀羅尼を説く
13）『大方等陀羅尼経』「爾時上首広為恒伽説受行実法応受如是陀羅尼章句」（T. vol.21，No.1339，p.645b）
14）『大方等陀羅尼経』「仏告阿難此人行時当浄其舎内焼香供養」（T. vol.21，No.1339，p.651a）
15）『大方等陀羅尼経』「七日長斉日三時洗浴著浄潔衣座仏形像作五色蓋誦此章句百二十遍遶百二十匝」（T. vol.21，No.1339，p.645b）
16）『大方等陀羅尼経』「吾当為汝略説諸陀羅尼名字」（T. vol.21，No.1339，p.641b）
17）僧祐『出三蔵記集』（T. vol.55，No.2145，pp.102c~103b）
18）慧皎『高僧伝』（T. vol.50，No.2059，pp.335c~337b）
19）円照『貞元新定釈教目録』（T. vol.55，No.2157，p.817a~c）
20）『魏書』「盧水胡沮渠蒙遜伝」（中華書局，1974，pp.2208~2209）
21）『北史』「沮渠蒙遜伝」（中華書局，1974，p.3085）
22）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397）
23）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，pp.5c~7a）趣意
24）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，pp.22c）趣意
25）『大方等大集経』「於一字中説一切法一字者所謂為阿阿者諸字之初菩薩摩訶薩説阿字時即能演説一切諸法」（T. vol.13，No.397，p.23a）
26）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.145a~c）
27）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.155a）
28）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.156a）
29）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.156b）
30）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，pp.216c~217a）
31）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.217c）
32）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.218a~b）
33）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.219a~b）
34）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.219c）
35）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.220c）、ただし浄業陀羅尼の名はないが、「我当施汝大神良呪能浄諸業」（p.220a）と云うことによるか

36）『大方等大集経』「畢竟尽苦是名為呪」（T. vol.13，No.397，p.222a）
37）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.240a~b）
38）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.241b~c）
39）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.242b）
40）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.244a~b）
41）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.245a~b）
42）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.245c）
43）『大方等大集経』「此陀羅尼名滅一切悪及諸悪夢」（T. vol.13，No.397，p.249b）
44）『大方等大集経』「奢摩裴多悉致那利大授記陀羅尼」（T. vol.13，No.397，pp.253c~254a）
45）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.250b~c）
46）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.254a）
47）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.290b~c）
48）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.295b~c）
49）『大方等大集経』巻四十九には魔王波旬の説く呪があり、「若復見彼住於閑林比丘比丘尼優婆塞優婆夷及余衆生修第一義者」（T. vol.13，No.397，p.320b）と説かれていることに依るものと思われるが、巻四十八に「是名菩薩摩訶薩住於閑林修第一義諦」（p.314b）と説かれる呪がある
50）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，pp.326c~327b）
51）『大方等大集経』「大力雄猛不可害輪大明呪句」（T. vol.13，No.397，pp.352a~353a）
52）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.356a）
53）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.356b）
54）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.356c）
55）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.357a）
56）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.369c）
57）この四つの陀羅尼に関しては、『大方等大集経』巻五十八にその名を見出すことが出来ない。ただ、巻五十八では地蔵菩薩が「幢杖陀羅尼」を説く前に、須弥蔵龍仙菩薩、善住龍王、難陀婆難陀龍王、阿那婆達多龍王、婆楼那龍王、摩那須婆帝龍王、薬生乾闥婆仙が陀羅尼を説いており（T. vol.13，No.397，pp.388c~391b）、これらを指すか？
58）『大方等大集経』（T. vol.13，No.397，p.391b）
59）『大方等大集経』「我今亦欲説大陀羅尼名一切如来語言音声発幢蓋摩尼願眼」（T.

vol.13, No.397, p.391c）

60）『大方等大集経』「為擁護故説大陀羅尼名能懼尸利子利奴」（T. vol.13, No.397, p.392a）

61）『大方等大集経』（T. vol.13, No.397, p.392b）

62）『大方等大集経』（T. vol.13, No.397, p.394a）、ただし「豊饒」という名は見当たらない

63）『大方等大集経』「若有比丘比丘尼優婆塞優婆夷欲見我者当浄其身持戒精進於一日中三時洗浴断食三日独在静処若仏像辺若在塔中若処静室以妙香華種種幡蓋及諸味漿供養於仏面正東向読誦如是陀羅尼句」（T. vol.13, No.397, p.157a）

64）『作世水宅心陀羅尼』（『卍続蔵経』Z. vol.3, X. vol.2, R. vol.3, No.203）

65）『昭和法宝総目録』vol.2, p.514a, No.178

66）『金光明経』（T. vol.16, No.663, p.345b）

67）『金光明経』「若有欲得財宝増長是人当於自所住処応浄掃灑洗浴其身著鮮白衣妙香塗身為我至心三称彼仏宝華琉璃世尊名号礼拝供養焼香散華亦当三称金光明経至誠発願別以香華種種美味供施於我散灑諸方爾時当説如是章句」（T. vol.16, No.663, p.345b）

68）『金光明経』巻一「有四如来東方名阿閦南方名宝相西方名無量寿北方名微妙声」（T. vol.16, No.663, p.336a）、巻二「東方阿閦如来南方宝相如来西方無量寿仏北方微妙声仏」（p.345c）

69）『観仏三昧海経』「東方有国国名妙喜彼土有仏号曰阿閦即第一比丘是南方有国国名日歓喜仏号宝相即第二比丘是西方有国国名極楽仏号無量寿第三比丘是北方有国国名蓮華荘厳仏号微妙声第四比丘是」（T. vol.15, No.643, p.689a）

70）『金光明経』「金光明経大辯天神品第七」（T. vol.16, No.663, pp.344c~345a）、「金光明経堅牢地神品第九」（pp.345c~346b）、「金光明経散脂鬼神品第十」（p.346b~c）

71）“Varāhapurāṇa”（28-13~28）、“Varāhapurāṇa” では、Sarasvatī ではなく、Durgā の説話となっている

72）“Ṛgveda”（1-160-2）では、“Dyaus” と “Pṛthivī” とは天地両神として、諸神の父母とされるが、Dyaus が単独で讃頌に登場することはない

73）大村が参考にしたと思われる Monier Williams “Sanskrit English Dictionary” では、“daughter of Pṛthu” となっており（Oxford, 1899, p.646a）、“Bhagavatapurāṇa”（4-18-27）や、“Viṣṇupurāṇa”（1-13-89）でも、Pṛthivī は、Pṛthu の娘とされている

74）智昇『開元釈教録』「嘗遊西印度有一小国請騰講金光明経」（T. vol.55,

No.2154，p.478a）

75）『悲華経』（T. vol.3，No.157）

76）『大乗悲分陀利経』（T. vol.3，No.158）

77）『大般涅槃経』（T. vol.12，No.374，p.370a）

78）『仏説大般泥洹経』（T. vol.12，No.376，p.856b）

79）『大般涅槃経』（T. vol.12，No.374，p.602a）

80）『大方等無想経』（T. vol.12，No.387）、異本では『大方等大雲経』

81）『大方等無想経』巻二「降雨」（T. vol.12，No.387，p.1084c）、巻四「祈雨」（p.1094b）

82）『治禅病秘要法』（T. vol.15，No.620）、正蔵では、『治禅病秘要法』、または『治禅病秘要経』で、『昭和法宝総目録』の『大日本校訂縮刷大蔵経目録』でも「治禅病秘要法」（『昭和法宝総目録』vol.2，p.450b-No.617）、『大日本校訂蔵経目録』でも「治禅病秘要法」、または「治禅病秘要経」（『昭和法宝総目録』vol.2，p.487b-No.649）で「治禅病秘要法経」とはなっていない

83）『治禅病秘要法』「治風大法」（T. vol.15，No.620，p.340b）、「応当憶持一切音声陀羅尼」（p.341c）

84）『仏説観弥勒菩薩上生兜率天経』（T. vol.14，No.452）

85）正蔵では、『仏説観弥勒菩薩上生兜率天経』は経集部に収められているが、大村が参考にしたと思われる『大日本校訂縮刷大蔵経』では秘密部に収められている（『昭和法宝総目録』vol.2，p.460b）

86）『治禅病秘要法』「後序」（T. vol.15，No.620，p.342b）

87）僧祐『出三蔵記集』巻二（T. vol.55，No.2145，p.13a）、巻十四（p.106b~c）、巻九に「禪要秘密治病経記第十五　出経後記」（p.66a~b）がある

88）慧皎『高僧伝』（T. vol.50，No.2059，p.337a）

89）智昇『開元釈教録』（T. vol.55，No.2154，p.521a~b）

90）『大方広十輪経』（T. vol.13，No.410）

91）『大集経』の「第十三分」は「日密分」にあたるが、『十輪経』とは対応していない。大村は、智昇『開元釈教録』の「大方等大集経」の所で「十輪経是第十三分〈初云説月蔵経已次説此経此十輪後第十四分本在西方未流於此〉」（T. vol.55，No.2154，p.588b）と言っていることによっているものと思われる

92）『大方広十輪経』巻一「地蔵菩薩」（T. vol.13，No.410，p.685b~c）、巻四「天蔵大梵」（p.701a~b）

93）『賢愚経』（T. vol.4，No.202）

94）僧祐『出三蔵記集』「賢愚経記第二十」（T. vol.55，No.2145，pp.67c~68a）、ただし「慧

覚」の名はなく、「釈曇学威徳等」となっている

95） 智昇『開元釈教録』（T. vol.55，No.2154，p.539b~c）、「沙門釈慧覚一云曇覚」として、僧祐も引いている

96）『賢愚経』（T. vol.4，No.202，p.438b）

97） 大安元年は金の年号 [1209]、あるいは西夏の年号 [1075] で、文成帝の年号ならば、太安元年 [455] の誤りか。ただし、『魏書』「釈老志」では「和平 [460~465] 初」（中華書局，1974，p.3037）、智昇『開元釈教録』（T. vol.55，No.2154，p.539c）や道宣『続高僧伝』（T. vol.50，No.2060，p.427c）では、「和平年」となっており、沙門統となったのは和平元年 [460] と考えられているので、和平元年の誤りであろう

98）『魏書』「釈老志」（中華書局，1974，p.3037）

99） 智昇『開元釈教録』（T. vol.55，No.2154，pp.539c~540a）

100） 道宣『続高僧伝』（T. vol.50，No.2060，pp.427c~428a）

101） 大村西崖『支那美術史彫塑篇』（仏書刊行会図像部，1915，pp.179~184）

102）『大吉義神呪経』（T. vol.21，No.1335）

103） 円照『貞元新定釈教目録』（T. vol.55，No.2157，p.838a）

104）『大吉義神呪経』（T. vol.21，No.1335，p.569b）、ただし正蔵では「令」が「為」となっており、「能く人天の為に大擁護を作す」と読むべきか

105）『大吉義神呪経』（T. vol.21，No.1335，p.579b）

106）『大吉義神呪経』（T. vol.21，No.1335，p.579c）

107） 釈尊の説く九首の呪は、正蔵の 569b~c，569c~570a，570b~c，571a，571c（2），572a，578b，578c の九ヶ所に見られる

108） 摩醯首羅の説く二首の呪は、正蔵の 578c，579a の二ヶ所に見られる

109） 梵天の説く呪は、正蔵の 572b~c に見られる

110） 帝釈天の説く呪は、正蔵の 575a に見られる

111） 四天王で呪が一首ではなく、毘沙門天（575b~c）、提頭頼吒（576a）、毘留勒（576b）、毘留博叉（576b~c）がそれぞれ一首を説いている

112） 魔王波旬が説く呪は、正蔵の 573a に見られる

113） 化楽天が説く呪は、正蔵の 573b に見られる

114） 他化自在天が説く呪は、正蔵の 573c に見られる

115） 大村は、他化天と、他化自在天とを区別している。これは、他化自在天が呪を説いたのに続き、他化天が語った後で、呪が説かれているものを、他化天が説いたものと考えたのであろう。しかし、この呪は「兜率陀天王 [Tuṣita]」が説

いたものである（574a~b）

116） 焔摩天が説く呪は、正蔵の 574c に見られる

117） 毘浮沙羅刹王が説く二首の呪は、正蔵の 576c~577a，577a の二ヶ所に見られるが、前者は羅刹の名を挙げたもので、呪とはいえない。これも呪とするなら、毘沙門天が呪を説く前に夜叉鬼母の名字を挙げているもの（575b）も呪とすべきであろう

118） 毘摩質多羅阿修羅王が説く呪は、正蔵の 577b に見られる

119） 婆伽羅龍王が説く呪は、正蔵の 577c に見られる。大村は「婆伽羅二龍王」として、おそらく「毘摩質多羅」と「婆伽羅」の二龍王としたものと思われるが、毘摩質多羅は阿修羅王であり、この呪は、「婆伽羅龍王と九十一子、及び諸龍」が説いたことになっている

120） 地神が説く呪は、正蔵の 578a に見られる

121） 『大吉義神呪経』（T. vol.21，No.1335，pp.568b~569a）に十六首の呪が説かれている

122） 智昇『開元釈教録』（T. vol.55，No.2154，p.540b~c）

123） 道宣『続高僧伝』巻一「魏南台永寧寺北天竺沙門菩提流支伝」（T. vol.50，No.2060，p.429a）、巻二十五「魏洛京永寧寺天竺僧勒那漫提伝」（p.644a~b）

124） 道宣『続高僧伝』（T. vol.50，No.2060，pp.428a~429a）

125） 円照『貞元新定釈教目録』「菩提留支」（T. vol.55，No.2157，pp.839c~840b）

126） 『仏説護諸童子陀羅尼経』（T. vol.19，No.1028a）

127） 『仏説護諸童子陀羅尼経』（T. vol.19，No.1028a，p.742b）、ただし一呪は梵天王が説いているが、一呪は「爾時世尊一切種智即説呪曰」とあるように世尊が説いたもの

128） 『仏説護諸童子陀羅尼経』（T. vol.19，No.1028a，p.742a~b）

129） 「乞夢呪」は正蔵の本文にはなく、注記で「宋本」に「乞夢陀羅尼呪」があるとする（p.742 脚注 39）

130） 『深密解脱経』（T. vol.16，No.675）

131） 『謗仏経』（T. vol.17，No.831）

132） 『入楞伽経』（T. vol.16，No.671）

133） 『深密解脱経序』「以永熙二年」（T. vol.16，No.675，p.665a）

134） 『解深密経』（T. vol.16，No.676）

135） 『深密解脱経』「一時婆伽婆住法界殿如来境界処」（T. vol.16，No.675，p.665b）

136） 『仏説決定総持経』（T. vol.17，No.811）

137）『入楞伽経』（T. vol.16，No.671，p.564c，p.565a）
138）『楞伽阿跋多羅宝経』（T. vol.16，No.670）
139）智昇『開元釈教録』（T. vol.55，No.2154，p.542b）
140）道宣『続高僧伝』（T. vol.50，No.2060，p.429a）
141）『仏説阿難陀目佉尼呵離陀鄰尼経』（T. vol.19，No.1015）
142）『金剛上味陀羅尼経』（T. vol.21，No.1344）
143）『仏説出生無量門持経』（T. vol.19，No.1012）
144）『仏説阿難陀目佉尼呵離陀鄰尼経』「現在仏所説如是神呪四十八名」（T. vol.19，No.1015，p.692c）
145）楊衒之『洛陽伽藍記』（T. vol.51，No.2092，p.1015a）
146）楊衒之『洛陽伽藍記』（T. vol.51，No.2092，p.1020b~c）
147）『魏書』「列伝第九十西域」（中華書局，1974，p.2280）
148）『北史』「列伝第八十五西域」（中華書局，1974，p.3232）
149）『魏書』「列伝第八十九」（中華書局，1974，p.2243）
150）『北史』「列伝第八十五西域」（中華書局，1974，p.3212）
151）『魏書』「列伝第九十西域」（中華書局，1974，p.2265）
152）『周書』「列伝第四十二異域下」（中華書局，1974，p.916）
153）『北史』「列伝第八十五西域」（中華書局，1974，p.3216）
154）『魏書』「列伝第九十西域」（中華書局，1974，p.2269）
155）『北史』「列伝第八十五西域」（中華書局，1974，p.3220）
156）慧皎『高僧伝』（T. vol.50，No.2059，pp.340a~341b）
157）『菩薩善戒経』（T. vol.30，No.1582）
158）『菩薩善戒経』（T. vol.30，No.1582，p.996b~c）
159）『菩薩善戒経』（T. vol.30，No.1582，p.996c）
160）『菩薩善戒経』（T. vol.30，No.1583）、正蔵では『菩薩善戒経』一巻となっており、副題として「優波離問菩薩受戒法」となっている（p.1013c）
161）『菩薩善戒経』「爾時於寂静処礼十方仏東向像前右膝著地合掌而言」（T. vol.30，No.1583，p.1014a）
162）『虚空蔵菩薩神呪経』（T. vol.13，No.407）
163）『観虚空蔵菩薩経』（T. vol.13，No.409）
164）『仏説観普賢菩薩行法経』（T. vol.9，No.277）
165）『仏説象腋経』（T. vol.17，No.814）
166）慧皎『高僧伝』（T. vol.50，No.2059，pp.342c~343a）

167） 智昇『開元釈教録』（T. vol.55, No.2154, p.524b~c）
168）『虚空蔵菩薩経』（T. vol.13, No.405）
169）『大宝積経』巻第九十「優波離会」（T. vol.11, No.310, pp.515~c516a）
170）『七仏八菩薩所説大陀羅尼神呪経』（T. vol.21, No.1332）、「虚空蔵菩薩陀羅尼」（p.541b~c）、「集法悦捨苦陀羅尼経」（p.544b）
171）『観虚空蔵菩薩経』（T. vol.13, No.409, pp.678a~680c）
172）『仏説無希望経』（T. vol.17, No.813）
173）『仏説観無量寿仏経』（T. vol.12, No.365）
174）『仏説観薬王薬上二菩薩経』（T. vol.20, No.1161）
175） 慧皎『高僧伝』（T. vol.50, No.2059, pp.343c~344a）
176） 智昇『開元釈教録』（T. vol.55, No.2154, p.524a）
177）『仏説観薬王薬上二菩薩経』（T. vol.20, No.1161, p.661b）
178）『仏説観薬王薬上二菩薩経』（T. vol.20, No.1161, p.661c）
179） 梁の太祖は、『高僧伝』の「斉文恵文宣及梁太祖並敬以師礼焉」（T. vol.50, No.2059, p.345a）によるものと思われるが、梁に太祖と呼ばれた皇帝はいない。もし太宗が簡文帝（549~551）を指すなら、生年が 503 年なので、阿那摩低が永明の末年（493）に示寂していたとすれば、年代があわない。また、梁の最初の皇帝の高祖武帝（502~549）は、生年が 464 年であり、後に皇帝菩薩と呼ばれたように仏教への信仰が厚かったので、始祖の意味で太祖と言ったとしたら、その可能性は高い。さらに、その始祖という意味なら、斉の太祖高帝（479~482）であった可能性も、年代的に否定できない
180） 慧皎『高僧伝』（T. vol.50, No.2059, p.345a）
181） 道世『法苑珠林』（T. vol.53, No.2122, p.746c）
182） 太始四年は『高僧伝』の「大始四年」あるいは「太始四年」（T. vol.50, No.2059, p.345a）によるものであろうが、年代や、その前に「至太宗之世」（465~472）とあるので、泰始四年（468）の誤り
183） 慧皎『高僧伝』（T. vol.50, No.2059, pp.344a~345a）
184）『阿難陀目佉尼呵離陀経』（T. vol.19, No.1013）
185）『抜一切業障根本得生浄土神呪』（T. vol.12, No.368）
186）「神力伝」は、『抜一切業障根本得生浄土神呪』の末尾に附されている「阿弥陀経不思議神力伝」（pp.351c~352a）のことで、「抜一切業障根本得生浄土神呪者乃宋元嘉末年求那跋陀重奉制訳」（p.352a）とある
187）『仏説出生無量門持経』（T. vol.19, No.1012）

188）『仏説阿難陀目佉呵離陀鄰尼経』（T. vol.19，No.1015）
189）『仏説阿弥陀仏根本秘密神呪経』（『卍続蔵経』Z. vol.3，No.180，X. vol.2，No.205）
190）『仏説阿弥陀仏根本秘密神呪経』「曹魏朝三蔵菩提流支奉　詔訳」（『卍続蔵経』Z. vol.3，p.414a，X. vol.2，p.887c，R. p.827a）
191）『仏説阿弥陀経』（T. vol.12，No.366）
192）『仏説灌頂七万二千神王護比丘呪経』「仏説灌頂抜除過罪生死得度経巻十二」（T. vol.21，No.1331，pp.532b~536b）
193）この「薬師経序」とは、義浄訳『薬師瑠璃光七仏本願功徳経』（T. vol.14，No.451）に序はないので、達摩笈多 [Dharmagupta，?~619] 訳『仏説薬師如来本願経』にある「薬師如来本願功徳経序」に「昔宋孝武之世鹿野寺沙門慧簡已曾訳出在世流行」（T. vol.14，No.449，p.401a）とあるものを指すと思われる
194）僧祐『出三蔵記集』「灌頂経一巻〈一名薬師琉璃光経或名灌頂抜除過罪生死得度経〉右一部宋孝武帝大明元年魅陵鹿野寺比丘慧簡依経抄撰〈此経後有続命法所以偏行於世〉」（T. vol.55，No.2145，p.39a）
195）智昇『開元釈教録』（T. vol.55，No.2154，p.531b~c）
196）『無量門破魔陀羅尼経』（T. vol.19，No.1014）
197）僧祐『出三蔵記集』（T. vol.55，No.2145，p.106c）
198）慧皎『高僧伝』（T. vol.50，No.2059，p.377a~c）
199）道世『法苑珠林』（T. vol.53，No.2122，p.748b~c）
200）智昇『開元釈教録』（T. vol.55，No.2154，p.531c）
201）『仏説出生無量門持経』（T. vol.19，No.1012）
202）『無量門破魔陀羅尼経』（T. vol.19，No.1014，p.691b~c）
203）智昇『開元釈教録』「十方仏神呪一巻　四天王神呪一巻　十二因縁結縷神呪一巻　摩訶神呪一巻　移山神呪一巻　降魔神呪一巻　威徳陀羅神呪一巻〈本作成字錯也〉　和魔結神呪一巻」（T. vol.55，No.2154，p.533b）
204）円照『貞元新定釈教目録』「十方仏神呪一巻　四天王神呪一巻　十二因縁結縷神呪一巻　摩訶神呪一巻　移山神呪一巻　降魔神呪一巻　威徳陀羅神呪一巻〈本作成字錯〉　和魔結神呪一巻」（T. vol.55，No.2157，p.830b）
205）『仏説灌頂七万二千神王護比丘呪経』（T. vol.21，No.1331）
206）僧祐『出三蔵記集』の巻二にはなく、巻四に「灌頂普広経一巻〈本名普広菩薩経或名灌頂随願往生十方浄土経凡十一経従七万二千神王呪至召五方龍王呪凡九経是旧集灌頂総名大灌頂経従梵天神策及普広経抜除過罪経凡三巻是後人所集足大灌頂為十二巻其抜除過罪経一巻摘入疑経録中故不両載〉」（T. vol.55，

No.2145，p.31b）とあることによる

207）僧祐『出三蔵記集』（T. vol.55，No.2145，pp.98c~99a）

208）慧皎『高僧伝』（T. vol.50，No.2059，pp.327c~328a）

209）法経等『衆経目録』（T. vol.55，No.2146）

210）費長房『歴代三宝紀』に「灌頂経九巻」「大孔雀王神呪経一巻」「孔雀王雑神呪経一巻」の計三部十一巻を帛尸梨蜜多羅訳とする（T. vol49，No.2034，p.69a）

211）道宣『大唐内典録』（T. vol.55，No.2149，p.286c）、「十二巻或九巻」として帛尸梨蜜多羅訳としており、巻九（p.313c）も同様の記述があるが、巻三（p.244b~c）に『歴代三宝紀』と同文が見られる

212）智昇『開元釈教録』で「大灌頂経十二巻」を含めた三部十四巻を帛尸梨蜜多羅訳とする（T. vol.55，No.2154，p.503a）

213）円照『貞元新定釈教目録』も『開元録』と同様である（T. vol.55，No.2157，p.800a）

214）望月信亨「疑似経と偽妄経（二）」（『仏書研究』33，仏書研究会，1917，p.1）

215）『仏説灌頂七万二千神王護比丘呪経』（T. vol.21，No.1331）「仏説灌頂七万二千神王護比丘呪経巻第一」（p.495a）「仏説灌頂十二万神王護比丘尼経巻第二」（p.499b）「仏説灌頂三帰五戒帯佩護身呪経巻第三」（p.501c）「仏説灌頂百結神王護身呪経巻第四」（p.504c）「仏説灌頂呪宮宅神王守鎮左右経巻第五」（p.508c）「仏説灌頂塚墓因縁四方神呪経巻第六」（p.512a）「仏説灌頂伏魔封印大神呪経巻第七」（p.515a）「仏説灌頂摩尼羅亶大神呪経巻第八」（p.517c）「仏説灌頂召五方龍王摂疫毒神呪上品経巻第九」（521a）「仏説灌頂梵天神策経巻第十」（p.523c）「仏説灌頂随願往生十方浄土経巻第十一」（p.528c）「仏説灌頂抜除過罪生死得度経巻第十二」（p.532b）

216）「仏説灌頂塚墓因縁四方神呪経巻第六」（T. vol.21，p.512b）

217）巻二ではなく、「仏説灌頂七万二千神王護比丘呪経巻第一」（T. vol.21，p.497c）

218）「仏説灌頂塚墓因縁四方神呪経巻第六」（T. vol.21，p.513b）

219）「仏説灌頂抜除過罪生死得度経巻第十二」（T. vol.21，p.532b~）

220）それぞれの巻数は、「帯佩護身呪」が巻三、「護諸比丘呪」が巻一、「護比丘尼」が巻二、「神王護身呪」が巻四で、大村の記述と相違する

221）「仏説灌頂七万二千神王護比丘呪経巻第一」（T. vol.21，p.49b）

222）「仏説灌頂十二万神王護比丘尼経巻第二」（T. vol.21，p.501b）

223）「仏説灌頂呪宮宅神王守鎮左右経巻第五」（T. vol.21，p.511b）

224）智昇『開元釈教録』（T. vol.55，No.2154，p.536a~b）

225）慧皎『高僧伝』（T. vol.50，No.2059，p.345a~b）

226） 智昇『開元釈教録』（T. vol.55，No.2154，p.536b）
227）『摩訶摩耶経』（T. vol.12，No.383）
228） 智昇『開元釈教録』（T. vol.55，No.2154，p.536c）
229）『摩訶摩耶経』（T. vol.12，No.383，pp.1008c~1009a）
230）『摩訶摩耶経』（T. vol.12，No.383，p.1009a）
231） 天鑑五年は天監五年 [506] の誤りか
232）『孔雀王呪経』（T. vol.19，No.984）
233）『舎利弗陀羅尼経』（T. vol.19，No.1016）
234）『八吉祥経』（T. vol.14，No.430）
235）『文殊師利問経』（T. vol.14，No.468）
236） 天鑑二年も天監二年 [503] の誤りか
237）『宝雲経』（T. vol.16，No.658）
238） 道宣『続高僧伝』（T. vol.50，No.2060，p.426a）
239） 智昇『開元釈教録』（T. vol.55，No.2154，p.537b~c）
240）『仏説出生無量門持経』（T. vol.19，No.1012）
241）『仏説八吉祥神呪経』（T. vol.14，No.427）
242）『仏説八陽神呪経』（T. vol.14，No.428）
243）『二十八夜叉大軍王名号』（『卍続蔵経』Z. vol.3，No.158，X. vol.2，No.183）
244）『二十八夜叉大軍王名号』「三蔵法師僧伽婆羅訳抄之」（『卍続蔵経』Z. vol.3，p.368d，X. vol.2，p.839c，R. p.736b）
245） 蕭繹『金楼子』巻六「自序篇第十四」

〈キーワード〉曇無懺、曇曜、菩提流支、求那跋摩、求那跋陀羅